

1985 夏合宿 剣における
事故報告書

信州大学山岳会
SACリーダー会

今回の合宿では、3年生部員をリーダーとした。これは、3年生部員の実力を高め、チームワークを高める点で評価している。細かい点については、問題もあり、これから克服すべく努力するが、今回の事故に関連して、会全体の問題について、私の思うところを、若干述べる。今回の事故については、ヘリ要請という結果になってしまったが、大筋ではスムーズに救助活動ができ、良かったと思っている。しかしながら、合宿後に行なった反省会の中で明らかになったことは、登はん技術に関する考え方の不一致であり、救助活動、救急法についての知識の不足である。これらは、急に今年度になってから欠如したのではなく、年と共に次第にあいまいになってきたと思う。だからといって、決してこのままでいいわけではなく、これを機に知識を補い実戦的に使えるまで、学習、討論、訓練を行なわなければならないだろう。さらに、より根本的には、会の運営の仕方自体、具体的には、リーダー部員相互の登はん技術に対する甘い信頼、意見交換の少なさを素直に反省し、必ずしも全ての面について統一された考え方を打ち出す必要はないが、これからは最低のことについては細かく考えていく事が、求められると思う。”リーダー部員だから大丈夫”といった考えを改め、これを機に相互に批判し、自己を分析できる能力を、これからはもっと高めていくべきだと思う。

一 事故について

三野和哉

今回、警察や大学の方々、それぞれ、R、現役部員の皆様に御迷惑をおかけして申し分けありませんでした。怪我の具合は幸い骨には異常なく、現在は痛みも軽くなり歩いて登校出来るようになりました。

事故当日は、特別調子が悪いということはありませんでしたが、ガスがわいていたこともあり取り付きでは、あまり乗り気ではありませんでした。

しかし、1ピッチ、2ピッチと登るうちに天気も良くなり調子も出てきました。4ピッチ目の終頃、傾斜も緩くなりプロテクションも取ったということで習慣的に岩をチェックしただけで荷重してしまいました。テラスまで もう少しということもあって気が緩んでいたのだと思います。

反省することは、沢山あり、考えるほどに怖くなってきます。今後、再び、このような事がないように気をつけて行動してゆくつもりです。

夏山合宿 C. L 角谷道弘

今回初めて大きな合宿のリーダーをさせてもらい、いきなり事故を起こしてしまい自分自身かなりショックを受けた。ここ数年、信大山岳会では大きな事故を起こさず、自分も大学に入ってから初めて怪我人の搬出を経験して、戸惑う面も多かったが、無事、病院に収容でき怪我もたいしたことはなく、その点は良かったと思う。

リーダーとして自分自身はその日の全体の行動予定を考えるだけで精一杯というありさまで、個人の体調、精神的な面まで考える余裕がなく、大変頼り無いリーダーであったと思う。そして、事故後の行動についても、よく考えて行動したつもりであったが、今考えてみればまだまだ甘かった点があり自分のリーダーシップのなさを痛感した合宿であった。

事故を通して、現在の山岳会の問題点が浮き彫りにされたと思う。この機会にもう一度、リーダー会で、又は個人で、問題点を考え直し、今後の山行に生かすべきであろう。

Ⅰ 事故の概要

(1) 参加者の計画行程

A party 上森・川端 BC(熊の岩)→剣尾根→三ノ窓→(ピバーク)

B party 山下田・三野 BC→小窓ノ王南壁→三ノ窓→(ピバーク)

C party 上角谷・藤田・1年 BC→池ノ平→三ノ窓→(ピバーク)

この日、ツェルトを寝ること、ピンチカンを使ってみること、また、2年生部員の登山技術の向上を狙ったピバーク山行であった。8月31日には全員がチンネを登り、早くに帰って来る予定であった。

(2) 事故発生まで

A party BC→六峰終了→剣尾根終了→三ノ窓着、事故を目撃

B party BC→六峰終了→小窓ノ王取付 三野墜落

C party BC→真砂沢ロッジ→池ノ平→小窓→三ノ窓

(池ノ平→小窓間にてトランシーバーの交信で事故発生を知る。)

(3) 事故発生

時間 8月30日 午後2時

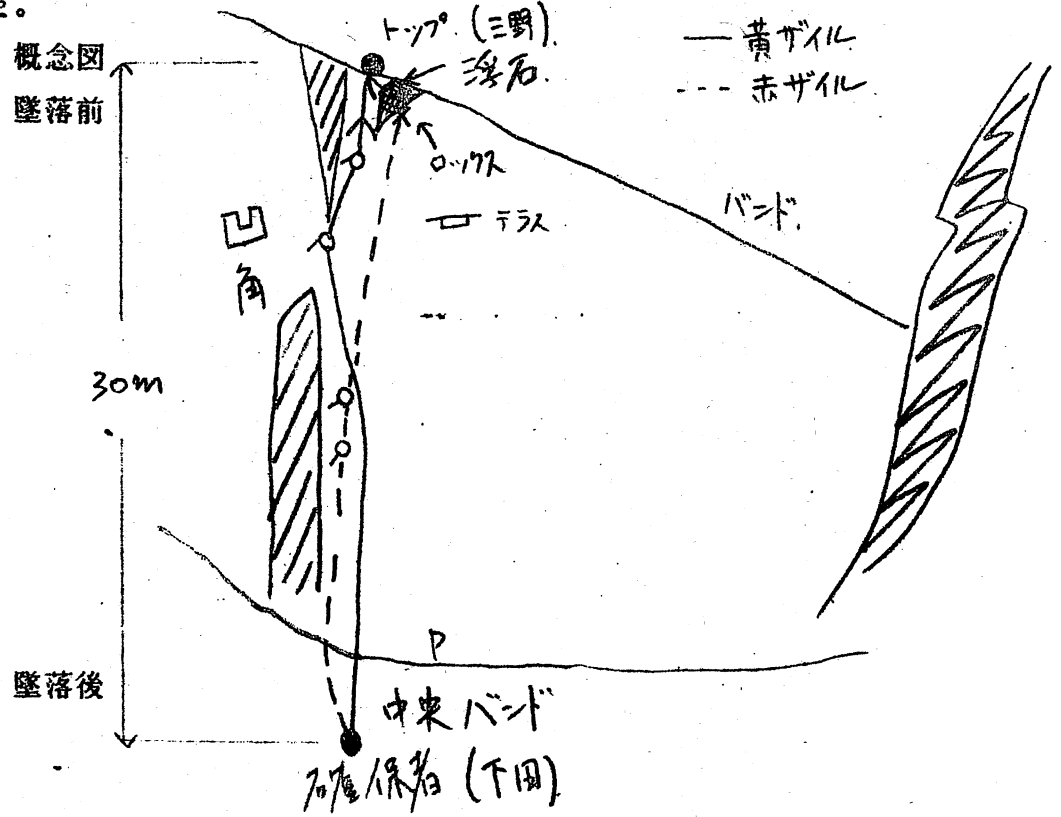
場所 小窓ノ王 南壁京都山岳会ルート

リードしていた三野が、浮石を掴みザック大の岩と共に15～20m墜落。浮石の下のクラックは、ロックズ(No. 4)でプロテクションをとったが、浮石と共にロックズが外れ、5m程下のボルトのプロテクションで止まった。三野は、5～6m下のテラスで一度バウンドし、その際腰を強打した。止まったとき、三野は頭が下になっていたが、意識はあり返事をした。

—三野の証言— 4 pitch目までつるべで登り、落ちる所までは少し難ししと感じていたが、“落ちそう”とか“登れない”とは感じなかった。図(1)の“止まる所”で傾斜が緩くなったが、一応ロックズをセットした。その後特別気を付ける、ということはなく、そのままテラスまで行こうとした。岩に両手をかけて、片足しで乗り越えようとしたら岩が動きだした。フレイク状の岩が、根元から剥がれるように感じた。墜落の途中で、5～6m程下のテラスで腰を打ち、結局15～20m落ちて止まった。頭を下にした状態だった。直ぐ座った姿勢に戻ると、目の前が白くなり、初め岩が

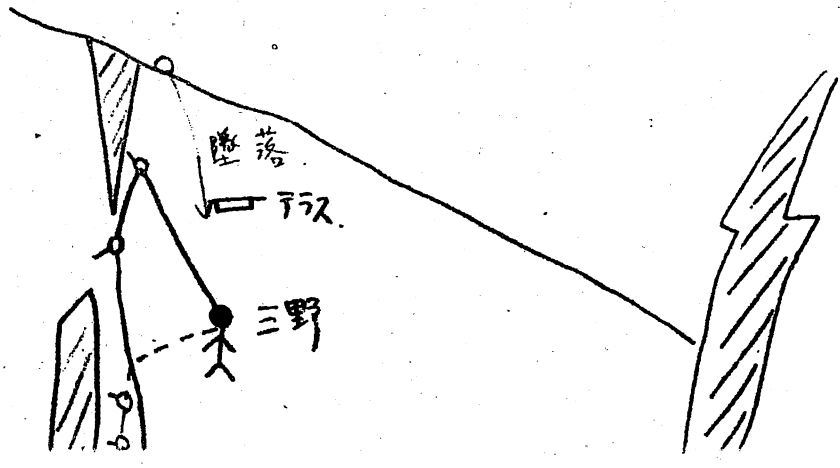
見えなくなりましたが、割と直ぐ戻った様に思う。この時意識は、はっきりしていた。

—下田の証言（確保者）— 1pitch目と3pitch目をリードしテラスに着いた。テラスにはピンがなく、3~4m程右の狭い所に古いハーケンがあった。テラスは広く、セルフビレイなしで確保することにした。三野が3pitch目を終了し4pitch目を登り始めるとき、ハーケンを渡したが、この時ジャンピングを渡すのを忘れた。



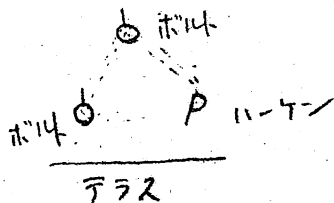
概念図
墜落前

墜落後



(4) 脱出

少し落ち着いてから、ブルージックを黄ザイルにセットしアブミを利用して、テラス(P. 4図参照)に着いた。午後2時30分頃だった。テラスに着いてから、残置ハーケンに黄ザイルでセルフビレイをとった。セルフビレイをとる前にブルージックを外してしまった。黄ザイルを外してザイルを一度引き上げランニングビレイから外した。再びザイルを降ろし、ジャンピング、ボルトを引き上げた。ザイル操作中に、ザイルがザックに引っ掛かりザックを落とした。下図のようにボルトを二本打ち、ジュリングを二本通し、かなりの間休んでいた。アブザイレンをして確保者のいるテラスに着いたのは、午後4時頃であった。アブザイレンの際、ランニングビレイは左5m位にあったため全て残置した。下田は、エイトカンを用いボディビレイをしていたのでザイルを固定出来ず動けなかった。



(5) 救助 ～三ノ窓まで～

三野が上のテラスに脱出するのを確認し、C partyとトランシーバーで交信しながら事故を発生より見ていたA party森、川端は、中央バンドのFix工作に出た。40mと15mのFixでグレードは3級だが脆く、ボロボロであった。

A. B両partyが合流したのは、午後4時頃である。C partyは、午後4時頃三ノ窓に到着。角谷は救助を手伝いに行き、藤田は1年と共に待機していた。

三野を前後から確保すると共に、三野の前後に下田と川端が付き添ってFixを通過させた。三ノ窓までは、さらに15mのアブザイレンの後、下田と川端で背負って降りた。三ノ窓には、午後6時頃到着した。

(6) ビバークの決定

- 1) 三野の容態は、外傷が無く腰を打ったため歩行困難であり、右足を上げると腰が特に痛んだ。肘を少々打ったが、大事には至らなかった。翌日には、状態が悪化するのではないかと思われた。また、腰を打っているため、骨や神経への影響が心配された。
- 2) 天候が台風に近い状態だったので、多少風が吹きガスがわいたり、消えたりしていたが雲海が見える夕焼けになった。しかし明日の天候は、天気図や天気

予報からしても、好天は望めそうもなかった。

1)、2)の点から判断して、

- ・その日(8月30日)のうちに先発隊を出して救助の要請をする。
- ・とりあえず1年生を熊の岩に降ろす。
- ・出来るだけ三野を下界に近づける。

など検討されたが、何をするにしても考えが統一されないまま隊を分けるのはいけない、という事になりその日は全員三ノ窓でピバークを決定した。

8月30、31日の当初の予定ではピバーク山行であったため、食料は充分に持っていた。

(7)翌日(8月31日)の救助方法の決定

救助は、出来るだけ速く行なうことを念頭に置き以下の通りに決定した。

- ・救助にあたる者とあたらない者に分ける
 - ・救助にあたらない者は、9月1日に下山する
 - ・救助のルートは、三ノ窓-長次郎雪溪下降-剣沢小屋-室堂とする
 - ・剣沢小屋へ連絡し、現役留守、警察へ救助方法の相談のための先発隊をつくる
- そして以下の通りパーティー分けをした。

A party L. 下田、安田 先発隊

5000円を持って剣沢小屋へ行き、現役留守に連絡し、警察へ救助方法の相談をする。

B party L. 角谷、藤田、川端、瀬川、三野

瀬川が他のメンバーの最小限の個装を持ち、他で三野を池ノ谷ガリーを背負って登り、熊の岩BCまで降ろし、必要な食糧、装備を持ち出来るだけ室堂に近い所まで降ろす。

C party L. 森、小野、飛田、豊田、中村貴志、松田

1年生を熊の岩BCまで降ろし、森は登り返してB partyに合流する。

*A、C partyは、9月1日に下山、B partyは、富山へ

事故通知書を作成し、遭対系統図では3番目のパターンであるので現役留守は、救助活動に参加しない。ヘリコプターを使うのは最終手段とした。理由は、第1にヘリコプターが何処まで飛んでくれるか明らかでなく、第2に翌日の天候では飛ばない可能性も高いこと、第3に最高でも2日あれば室堂に行けること、等が上げられた。

三野は、腰を打っていたので不安ではあったが、意識はしっかりしていた。意識が明、出血多量という事態ではなかったので、自力脱出を当面追及した。

(8) 救助

8月31日 天気 曇時々雨

A party L. 下田、安田 先発隊

6:35 三ノ窓のゴル

6:55 池ノ谷乗越

8:40 平蔵谷出合

9:45 B partyとトランシーバーの交信

B party三野隊 熊の岩BC、三野の装備をまとめ、担いで降ろす。警察への依頼はしないが相談はする。

9:50 剣沢小屋着 電話にて現役留守、残留部員へ連絡

・細川不在 岩村、中村元太、古賀、加藤不在

11:00 OB留守の宮崎先生(農学部)に連絡がつく。山岳警備隊と相談したところ、ヘリを飛ばしたほうがよいとのことで、三野隊と連絡する

12:40 剣沢上空ヘリ着

12:50 ヘリ富山へ

13:15 岩村(現役留守)に連絡

13:30 剣沢小屋発

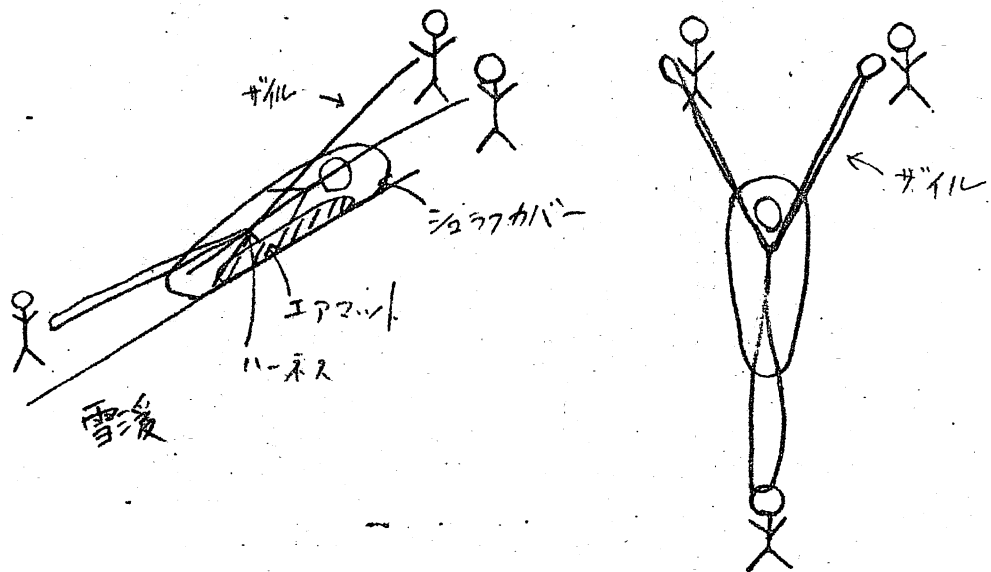
16:30 熊の岩BC着

B party L. 角谷、藤田、川端、瀬川、三野 三野隊

三野を交代で背負って池ノ谷乗越を通り熊の岩BCまでとりあえず降ろした。長門雪溪の下降では、森の上げたアイゼンを使用した。BCで食糧と設営具を5人、2日分用意した。B partyのメンバーのうち1年生の瀬川が豊田に変更し、C partyの森と飛田がサポート隊となった。

熊の岩からは同様に、藤田、角谷、森がアイゼンをはいて三野を交代で背負って降ろし、川端、飛田、豊田が歩荷隊としてB partyの必要な荷物を降ろした。長門雪溪途中の岩場では、三野は他の3人の助けを借ながらも自力でクライムダウンした。

岩場以下の雪渓では、下図の様な方法で三野を降ろした。



長次郎雪渓と剣沢の出合の直前で、剣沢派出所にいるA partyの下田とB partyの角谷とのトランシーバーによる交信で、ヘリを飛ばす可能性が出てきた。12時頃、角谷から下田にヘリを飛ばすことを正式に要請。その時、三野を長次郎雪渓と剣沢の出合まで降ろして待機していた。12時40分頃剣沢派出所から県警山岳警備隊の人が出合まで来てくれて結局12時50分ヘリが出合に到着。三野と角谷がヘリに乗り込みSACによる救助活動から県警による救助活動に移された。

【コースタイム】

	A party	B party	C party
三ノ窓	6:30	6:55	7:00
池ノ谷乗越	6:45	7:40	7:25
熊の岩	7:15	9:45	<u>8:15</u>
長次郎雪渓		10:15	
岩場		10:45	
剣沢出合	9:50	<u>11:40</u>	

② 下山後の反省点

1) 原因

- ・不可抗力（誰が行っても落ちた）
- ・チェックの甘さ

2) 登はん方法

- ・下田がセルフビレイを取ってなかった。
- ・ザイルが古く操作がしにくい。
- ・確保の方法が間違っていた。（エイトカンを使ったがボディビレイだった）
- ・ジャンピングを下田が持っていた。
- ・ランニングビレイの取り方が甘い。

3) 脱出

- ・F i x 工作に時間がかかった。（慎重に行動したため）

4) 三ノ窓

- ・ピバークの際、瀬川（1年）をツェルトに1人で寝かした。
- ・1年生の不安軽減について考える余裕がなかった。

5) 翌日

- ・パーティ編成を変える指示が遅れて、BCから川端と1年生が本隊（B p a r t y 三野隊）より遅れた。

③ 今回判ったこと

- ・事故でヘリコプターを飛ばした場合、山岳保険で1人100万円まで費用が下りる。
- ・ヘリコプターは、三ノ窓、熊の岩、山頂にも来ることが出来る。

4 今後の教訓として

- ・ 計画書には、大家さん、アルバイト先等の電話番号も記入し伝言してもらえるようにする。
- ・ 応急手当の知識、搬出方法等学習する。
- ・ トランシーバーの出力が弱く、使いづらかった。
- ・ 遭対基金も現役留守が全て持たず、山に入る人も持つべきである。
- ・ 計画書のメンバー変更等事前にもっとチェックするべきである。

今回、事故を起こしてしまい我々は深く反省しています。今後この様な事故を繰り返さぬよう注意していくつもりです。

1985 夏山合宿事故報告書
信州大学山岳会

1986. JUN